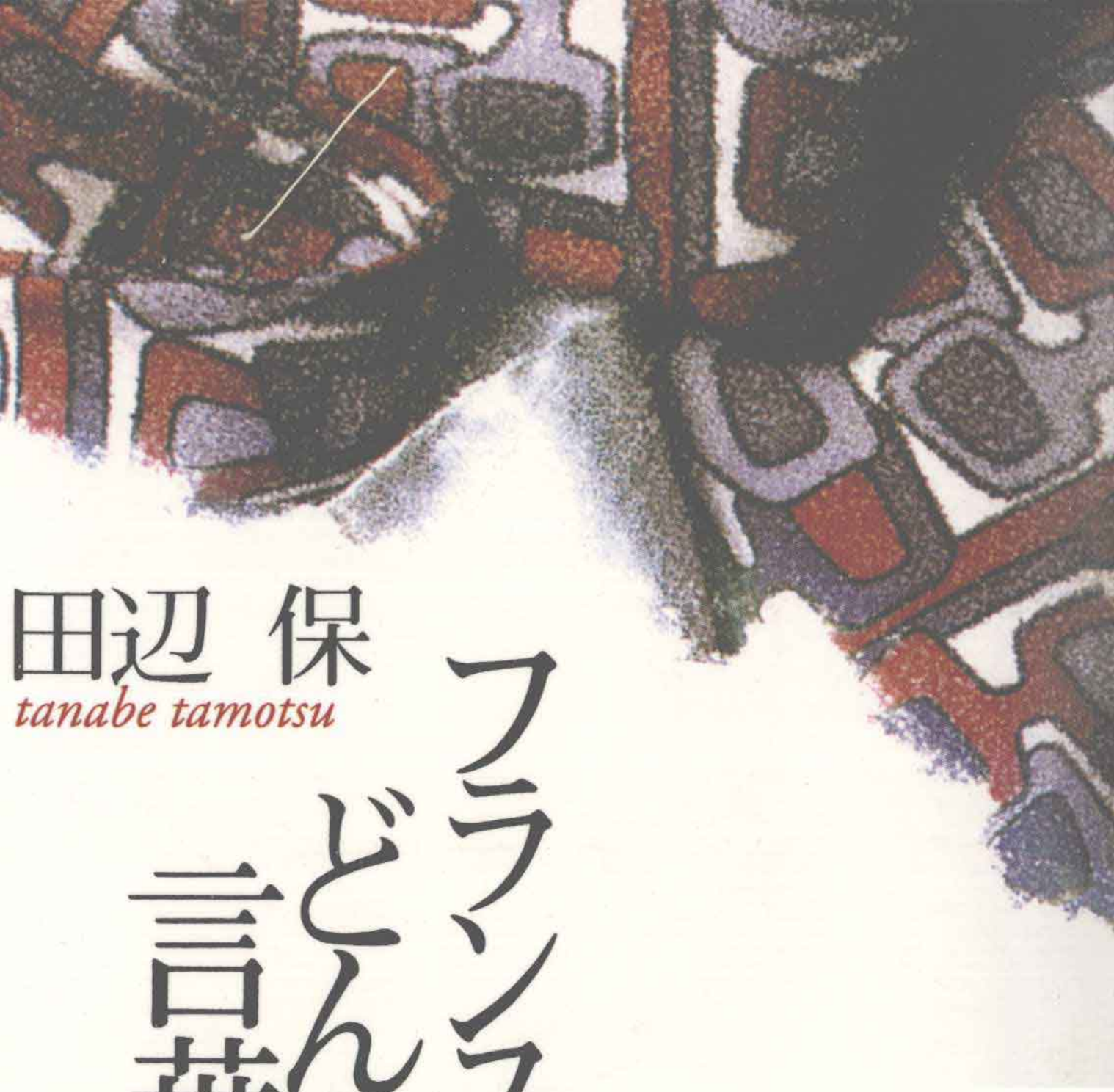

フランス語はどんな言葉か

田辺 保
tanabe tamotsu

田辺　保（たなべ　たもつ）
1930年京都生まれ。京都大学大学院修了。仏文学専攻。文学博士。大阪外国語大学，岡山大学，大阪市立大学各教授を経て，現在，神戸海星女子学院大学教授。著書に『パスカルの世界像』『シモーヌ・ヴェイユ』『フランス語の新しい学び方』『ブルターニュへの旅』など，訳書に『パスカル著作集（全7巻別巻2）』，シモーヌ・ヴェイユ『重力と恩寵』などがある。

講談社学術文庫

定価はカバーに表示してあります。

フランス語はどんな言葉か
田辺　保

1997年5月10日　第1刷発行
1999年4月20日　第5刷発行

発行者　野間佐和子
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話　編集部（03）5395-3512
販売部（03）5395-3626
製作部（03）5395-3615

装　幀　蟹江征治
印　刷　廣済堂印刷株式会社
製　本　株式会社国宝社

© Tamotsu Tanabe　1997　Printed in Japan

Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き，禁じられています。
落丁本・乱丁本は，小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。なお，この本についてのお問い合わせは学術文庫編集部宛にお願いいたします。

ISBN4-06-159281-5　（学術）

フランス語はどんな言葉か

田辺　保

講談社学術文庫

学術文庫版まえがき

本書は、一九六九年一月三十日、至誠堂新書の一冊として最初に公刊された（原題『フランス語のこころ』）。著者のまだ若かった時代の、記念すべき、なつかしい、そして今読みかえしてみると、やっぱり少し恥ずかしく顔が赤らんでくるたぐいの作品の一つである。初めてのフランス留学（一九六一―六二）から、まだそう日も経っていない頃だから、その火照（ほて）りもいくらか残っているし、気負（きお）ったところも少なからず目につく。叙述が未熟なのは若気の至りでまあまあゆるしてもらえるのかもしれないけれど、あれから二十年余……世界の状況も目まぐるしく移りかわったし、当然、フランスの事情もフランス語の地位や内実も同じではありえないはず。それなのに、このたび講談社学術文庫出版部のNさんのお目にとまって、文庫版として再刊しないかというありがたいお申し出をいただいた（実は、十年前ぐらいにも、幾分内容の手直しをして、初版と同じ至誠堂から再版してもらったことはある）。

ためらいはあった。全体の書き直しも考えないではなかった。たとえば、フランス

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

語のuniversalité（普遍性）についても、今ではフランス人内部からも反省や批判が出てきているし（今は、建て前上だけであっても、とにかく多言語主義multi-linguisme の時代である）、コンピューターとロックと婚前同棲（コアビタシヨン）の現在、フランス人の生活にしろ、俗語・流行語の問題にしろ、英語（……でしょうか、この固有性をなくして、国際的に通じる符牒（ふちょう）と化した言語）の乱入という現象にしろ、まだまだもっとデータをもりこみ、新しい視点から切りこんでみる必要はあるだろう。けれどもあらためて全体を読み返してみて、（自分の幼なさに、ところどころ微苦笑しながらも）、大筋において、フランス語の本質そのものについて自分自身の考えは今もそう変っていないことに気づいたものだ。何より特に、日本人であるわたしたちがフランス語という異質の外国語を学びつつ、どこに、何よりも目をとめねばならないのかを、自分ながらもう一度再発見した思いだった。わたし自身は、このあと、至誠堂から『フランス語への招待』（一九七〇）、講談社現代新書として『フランス語の新しい学び方』（一九八一）、何人かの同学の友との共著『フランス語で言えば』（一九八五、有斐閣）など、一連の同種のフランス語学関係書を公刊している。本書初版あとがきにも記しているアルベール・ドーザ『フランス語の特質（*Génie de la langue française*）』も、岡山大学在職中に同僚と協力して邦訳を出版することができた（一九八二、大修館書店）。そうした

書物を通じて、わたし自身の、日本人が学ぶフランス語の意味についての考え方は折々にもらしてきたつもりである。メディアや交通手段の発達により、日本とフランスの距離は格段に接近し、テイヤール・ド・シャルダンが五十年前に予言していた「地球の一体化（planétarisation）」の時代の到来が感じられる今、「本質的差異が新しい経験をもたらす」たぐいの外国語学習を媒介（ばいかい）として、「世界の中の日本」を知ることの大事さをいよいよ思わずにはいられない。二十年前にパリで逝った森有正の仕事の継承が本当に必要なのが、これからであろう。

本書はそんな歩みへの出発点だった。二十余年前の、日本人学生のフランスとの一接触点をうかがわせるドキュメントとして利用してもらうこともできるだろう。初版の「あとがき」から、読者へのメッセージとして次のような文章を抜き出してここにももう一度書きとめておきたい。

「わたしは、ひとつの本当に大切なものを保ちつづけている宝庫へ案内したかったのです。わたし自身が、これまでほかの人の何分の一かほんの少しだけ勉強して、そしてわずかばかり知りえたことの中から、せめて自分でいちばん大事なことだと思っていることをお伝えしたかったのです（……）」

「わたし自身は、語学の勉強は、文化的な背景や、国民の思考の体系をあわせて、十

分に研究することなしには、いびつな浅薄なものになってしまうと思っています。ですから、この本の中にもそういう要素をもり込もうとし、できるだけ資料を集め、自分自身の見方をつけ加えたつもりですが、まだまだ意にみちませんし、また独断におちいらなかったかと心配もしています。いろいろご批判やご意見をうかがえればありがたいと思います」

講談社学術文庫版として、この小著がふたたび陽の目を見る機会を与えてくださった、Nさんこと、中村武史氏のご配慮とご尽力とに心から感謝したい。

一九九七年三月

田辺　保

目次

学術文庫版まえがき……3
第一章　古いガリアのことば……13
1　フランス語とはどんなことばか　13
2　フランス語の土台　29
3　単語の語源をたずねる　38
第二章　そびえ立つカテドラル……53
1　教会の高い尖塔の下に　53
2　フランス人の生涯　62
3　たましいの故郷　82

第三章　ロワール川のほとり……88
1　典雅なシャトーの群れ　88
2　クラシックについて　99
第四章　カルチエ・ラタンにて……109
1　パリの学生生活　109
2　民衆のことば　115
第五章　にせの友「英語」……128
1　仏英の交渉　128
2　〝大西洋混沌語〟の様相　141
第六章　ドーデの風車小屋……154
1　感覚的なことば　154
2　姓の由来と固有名詞　171

第七章　エスプリとメゾン……185
1　フランスのエスプリ　185
2　さまざまな「家」　198
第八章　文法のはざまで……210
1　品質形容詞の位置について　210
2　冠詞について　217
3　動詞の変化について　229
第九章　フランス語のこころ……235
1　この「人間的なもの」　235
2　より美しいものへと　239

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

フランス語はどんな言葉か

第一章　古いガリアのことば

1　フランス語とはどんなことばか

オルリイからアンヴァリッドへ

北極を越えて、または、モスクワ経由で日本から飛んできた飛行機は、現在ではすべてパリのド・ゴール空港（Aéroport de Charles-de-Gaulle）へ到着します。しかし、一九七四年この空港が開港するまでは、ほとんどオルリイ（Aéroport d'Orly）へ着くのがふつうでした。六一年秋、わたしがはじめてフランスの土を踏んだときもそうでした。オルリイから、エール・フランスの連絡バスでパリ市中のアンヴァリッド空駅（Aérogare des Invalides）へむかう自動車道路（Autoroute du Sud）はさすがよく整備されていて、フランスへ着いたばかりの旅客のはずんだ心を気持よく目的地へはこんで行きます。みどりの芝生がきれいにかりこまれ、長い優美な曲線をえがいていく向こうに、やがてパリの町並みが見えてきます。各々（おのおの）の建物がかたい幾何学的な線で区切られ、澄んだ空に立体的な絵模様をつくりだして、たてよこの線がなん

ともいえない調和的な線のとれた美しさをかもしだしています。はじめて西洋の都会を見る人々には、思わずはっと胸がおどる瞬間です。かもしだすという言葉を今使いましたが、ほんとうはそんな情緒的なものでなく、一つ一つがくっきりと独立し、あざやかな対比を示しながら、しかも全体がひとつの美を組み上げているのです。このパリの町をバスのなかから見たとたん、わたしはふと、むかし大学の教室でならった次の文章が思いうかんできました。

《…la syntaxe française est incorruptible. C'est de là que résulte cette admirable clarté, base éternelle de notre langue. Ce qui n'est pas clair n'est pas français.》

（フランス語のこういう文の構成法が、くずれ去ることはない。わが国語の永遠の根底といってよい、このすばらしい明晰さは、ここから生じてきたのである。明晰でないものは、フランス語ではない）

フランスの作家リヴァロルが、一七八四年《*Discours sur l'universalité du français*》（フランス語の世界性について）の中で述べた有名な言葉です。わたしは京都の町で生まれ育ったのですが、陽春のころなど、市の三方をとりかこむ山々が

ぼっと薄いもやの中にかすんで、木立ちも家並みもその中にとけこんだようになり、個々の形がぼんやり消えたようになる光景を、いつも見慣れていましたので、はじめて、パリの遠景を見たときのこの印象はずいぶんつよかったのです。色や形がこんなに明るく、すきとおって見えたのは、日本では千メートル以上の高山へ登ったときしかなかったと、ふとそう思いました。ついでにもう一つ、最近、ガリシエという人の《*Grammaire expliquée de la langue française*》（フランス文法要解）の中で見つけた言葉もあげておきましょう。

《Une phrase est comme un édifice que l'on construit en combinant de diverses façons ces éléments simples que sont les mots.》

（ひとつの文章というのは、いわば建物だ。単語という単一な要素を、さまざまに組み合わせてその建物をつくるのだ）

ガリシエはその文法書の最後の章に、《L'Architecture de la phrase française》（フランス語文章の建築術）という題をつけています。パリの町並みとフランス語の文章――わたしの中にはそんな結びつきがいつのまにかできあがっていたのかもしれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com